世田谷村日記

石山修武

十一月二二日

昨晩はゆっくり休み、ここのところ疲れが少し計り抜けた。朝世田谷に何処かの海にいるハンマから電話があった。ネパールのジュニーからメールが入っていて、どうやら国王に会わなくてはいけないらしい。

十八時何故か新宿伊勢丹デパートの一階に居る。ブランドモノのフロアーで人が溢れている。怪し気に明るいフロアーである。堀川、向井と新宿松竹でたそがれ清兵衛みる。

十一月二三日

前橋へ。市根井君と会って高崎の森田兼次オヤジと会う。朝山邸、厚生館増築の打合わせの為。安藤同行。正午頃前橋着。市根井君の車で前橋へ。森田さんはお元気なようだった。二件の仕事のお願い。勿論心よくＯＫしていただく。曲がりくねった木を使う構造の朝山邸も森田さんと話していると何とかなりそうだの気分になるから不思議だ。この人には天性の人を力づける力があるようだ。その明るさに引っ張られたのか、市根井君も何とかやってみようの気になってくれたようだ。ホッとする。十六時過、市根井邸の現場を見る。良い基礎工事だった。作業場の木割細工を見る。ていねいな仕事をしている。よい大工になってくれている。私のワークショップの逸材だからな市根井君は。

十八時大宮で朝山さんと会う為に今、新幹線の中。チョッと疲れた。朝山さんＴＶ番組の件了解してくださる。夜半まで話した甲斐があった。

十一月二五日

昨日は流石に疲れて一日休んだ。一昨日朝山さんがＴＶ出演に同意して下さったので、家作り番組の製作も動きそうだ。

九時前地下へ。今日は地下のミーティングをしっかりしよう。ガレージハウスを動かす方法と山梨のコンテナ十二個で家を作りたい人への対応。中国のコンペが一応一段落したのでその後の対応について。コンバージョン。キルティプール計画の概略説明その他。十三時半河野鉄骨研究室来。将来は高橋工業と組んで日本中の工事をやってもらう積り。コンバージョンの件。

前橋で#1市根井邸の現場を見て、やっぱりこの職人は大事にしたいと考えている。現場が誠実なんだナア。日々の新しい仕事で頭がともすれば古い附合いの職人達の事を忘れがちになる。一番身近な人達の事を忘れてはいけない。メモするのは簡単だが、実行するのは困難です。ＭＥＭＯの鈴木博之の連載を読む。最後の一行にチョッと山本夏彦が乗り移っているネ、コレワ。十六時半、建築知識インタビュー。山本夏彦さんの事。話す。聞手が率直な女性で思わず余計な事までしゃべってしまった。話している内にザマー無い少し計りつまるモノがあった。今週のお別れの会の、お別れの言葉、頼まれているのだが、大丈夫かな。今晩の学科の懇談会は二一時始まりだそうで、チョッとコレワ辛い。三〇分で失礼しなければならない。ＴＶドキュメント製作はどうやら今週金曜日からスタートしてしまうようだ。

二〇時四五分田町東京飯店で建築学科の集り。二二時前一人抜けて世田谷へ。一昨日の午前様が体に応えている。全く、いくつ

になったら程々が身につくのやら。二三時過世田谷に戻る。地下にしばらく居て、上に登る。安藤の修士設計はなんとかなりそうだ。岡田紘史しな子夫妻より喪中につきの挨拶状いただく。山本夏彦さんの親戚からの葉書で、短文だが、よく真意が伝わってきた。お別れの会は山本夏彦らしくないと私は思うが、それを固苦しく言うのも恥ずかしい事だと思うから、出席しようと思う。

十一月二六日

昨夜はほとんど眠れず。八時四〇分地下へ。十四時半陸海博士論文相談。うまくいってない。努力が足りない。厳しく叱った。中国人にはハッキリものを言わなければならない。十五時北條氏夫妻来室。山梨県大月市岩殿山に住宅を建てたいのだと言う。しかもコンテナ十二台を集めて。何で私のところにはこういう人が狙ったようにやってくるのだろう。温室とコンテナの組み合わせでやりましょうと方針を決め、十二月末にもう一度お目にかかる事になった。十六時半大学退。十七時半頃東大病院に佐藤健を見舞う。眠っていたがすぐに起きて元気に話し始める。気力が戻っているのに驚く。十二月三日より毎日新聞の「佐藤健の現在」のルポタージュが始まるそうだ。その原稿を読ませてもらった。ジャズを聴きたいと言うのでベーシーの菅原にジャズのCDを三〇枚程セレクトしてもらい送ってもらう事にした。菅原のベーシーでの写真が健の枕許に飾ってあったのが印象的だった。二〇時半世田谷に戻る。二三時半まで地下に居て後上に上る。

十一月二七日

七時過本当に久し振りに屋上菜園に上る。生ゴミを埋め富士山を眺め、ゆっくりはしなかったが平穏な時を過ごした。植物や野菜よりもやっぱり人間の方に興味はゆくよな。八時二〇分過、地下に降りる。十勝の後藤さんと連絡。スノーボートは工事の最終のつめに来ている。ネパールから帰ったらすぐに北海道に行くようだな。十勝には雪が降ったらしい。柴原とスノーボートに使う布地その他の打合わせ。浜島邸、聖徳寺打合わせ。十三時前ひと休み。

十八時半大学にて「ひろしまハウス」レンガ積みツアー参加者のための小レクチャー。

十一月二十八日

十二時三〇分青山葬儀場。山本夏彦さんの「お別れの会」徳岡孝夫、秋山ちえ子、山崎洋子、安部譲二と共にお別れの辞を申し上げた。男性は私も含めて三名原稿を読み上げ、女性二人は原稿ナシのおしゃべりだった。

以下、私のお別れの言葉を記しておく。

今朝、家を出ると、遠くのさざん花の生垣の陰を曲がろうとしている山本さんの丸い背中をハッキリと見ました。世間では亡くなった、と噂さしているが、どうやらアテにならネエと思い当たりました。

地下鉄に乗ったら、遠い斜め向こうの席に、又も、もうろうとした、あなたの姿を見ました。あれだけもうろうとしているのだから確実に山本さんでした。

ここの近くの道でも遠くに先を歩く山本さんが居ました。オヤ、山本さんもお別れ会に行くのか、自分で自分にお別れに行くとは、誠に山本さんらしいと合点いたしました。

帰りの径でも会うにちがいありません。何年か先には、もっと

ひんぱんに会う事になりそうです。

しかももうろうとしていた姿、話し振りも段々、はっきりしてくるだろうと思われます。

そんな山本さんとの散歩の途中、恥ずかしいような花向けの言葉をいただいた記憶があります。

「狷介という言葉がある。ひと筋縄ではいかない癖ある人のことで、石山はこの狷介に近い人ではあるが、それはうちなるものをそのままそとにあらわすに含羞を帯びなければならないたちだからだと、同じくいられないたちの私は同情にたえないのである。

私はこのひと筋縄でいかない石山が同じくひと筋縄でいかない職人と対峙して、よく短時間に和するに感心して、いや待て建築家は職掌がら接客業者である。建主は一世一代の家を建てるのである。用意の金は十分ではないのである。それなのに望みは十分以上だから、それをなだめつ、すかしつして、しかも我をはるのだから骨である。それを繰り返しているから和することができるのかと合点した。

ただの狷介にすぎぬ私とは違うと、常に机の前を去らないで自ら「オブジェ」と称している私はそれと察したのである。」

これ程、建築家という者の正体を言い当てた言葉を知りません。しかも図星を突かれた私は、以降、狷介であるらしき自分から少し自由になれたような気がしています。

これからも「室内」という雑誌を介してますます御指導下さい。

ありがとうございます。

式場では本当に久しぶりに室内編集部の面々にお目にかかる事もできた。懐かしい顔にも会えて良かったと思う。

十六時二〇分ＴＢＳラジオインタビュー。十七時西谷主任と打ち合わせ。